

# 国語選抜試験

新中二

一 次の——線の読みを書きなさい。

- (1) 思い出を脳裏に刻む。  
(2) 山の風景を描写する。  
(3) 自分の考えを率直に述べる。  
(4) 目頭が熱くなる。  
(5) 自らの行いを省みる。

二 次の——線を漢字で書きなさい。

- (1) 冬服をタンスにしゆうのうする。  
(2) 調査たいししょうの遺跡を保存する。  
(3) 交通ひようしきの指示に従う。  
(4) 弟に留守をまかせる。  
(5) はげしい風が吹く。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の文の——線と——線の文節どうしの間係を、ア～エから選びなさい。

- ・天然のダイヤモンドは、かたくて美しいのが特徴だ。  
ア 主語・述語の間係      イ 修飾・被修飾の間係  
ウ 並立の間係              エ 補助の間係

問二 次の文はいくつの単語からなっていますか。漢数字で書きなさい。

- ・はるかな山の頂上に雪が白く積もっている。

問三 次の熟語の対義語を、漢字二字でそれぞれ書きなさい。

- (1) 解散  
(2) 感情

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

京にて猫をうしなへる者あり。厨子小路にいたり、身をやつし尋ねしが、ある所にて不思議に見付け、「これはわが猫」といふ。亭主出て「そちがという証拠は」。また「汝がいふ証拠は」。惜しく欲しくのあらそひなれば、是非、終にわがたず。

板倉伊賀守、是非の相手二人対座せさせ、くだんの猫を座敷の中におき、「もとの主も、今の主も、手に鯉一ふしづつ持ちて呼べ。生まれてよりそだてなれたる方へこそ行くべけれ」と。案のごとく、始めうしなひし者の膝の上へ、なくなきしことよ。

(安楽庵策伝「醒睡笑」より)

(注) 厨子小路——路地や小みち。 身をやつし——体がやせるくらい。

是非——正しいことと誤っていること。ここでは、どちらの言っていることが正しい、の意味。  
くだんの——例の。問題の。

問一 —— 線「厨子小路」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

問二 —— 線①「亭主」とありますが、これと同じ人物にあたるものを、ア～エから選びなさい。

- ア 板倉伊賀守      イ もとの主  
ウ 今の主          エ 始めうしなひし者

問三 —— 線②「わかたず」とありますが、この意味として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア はつきりしない      イ 別れられない  
ウ ひきさがらない      エ 惜しくはない

問四 —— 線③「是非の相手二人対座せさせ、くだんの猫を座敷の中におき」とありますが、板倉伊賀守がそうしたのはなぜですか。その理由を「猫に」の書き出して、現代語で十五字以内で書きなさい。

問五 この文章で、筆者が述べようとしたこととして最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア 板倉伊賀守にだまされた者の哀れさ。  
イ 鯉節を求めて動く猫の愛らしさ。  
ウ 猫の所有権をめぐる争いの無意味さ。  
エ 板倉伊賀守のさばきの鮮やかさ。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

〔街を行く半分ぐらいの人が携帯電話を耳にあてている。〕

① 歩きながら話さなければならぬような緊急の用件が、そんなに通常的にあるものだろうか、ぼくは不思議に思う。ぼくには、電話とは緊急のためのものという考えが、強く居座っている。もう少し観察してみる。一分一秒の遅れで億単位の損失を出すような金融取引をしている人が、六本木の雑踏の歩行者の半分もいるとは思えない。また、死ぬか生きるかの問題を抱えている人が、そんなに多くいるとも考えられない。

第一、そのような切羽詰まった顔で話しているわけではない。実に普通の顔である。普通よりもっと隙のある無防備の顔である。なぜ彼らは歩きながら話すのであろう。

言葉というものはなかなか気難しいもので、よほど覚悟を決め、姿勢を正して、いい意味の緊張を示さないと、美しさも、心地よさも提供してくれない。ぼくのじょうしきで云うと、歩きながらの会話では、まずもって、手持ちのささやかな数の言葉しか使えない。仮に、歩行しながらの携帯電話での会話であるなら、大事を伝える時には立ち止まって、呼吸を整え、新たな酸素を脳に巡らしてからでないかと、言葉にならないはずである。

しかし、② 街行く人を見てみると、会話の都合によって歩を止めるという人はまずいない。とすると、全く新たな言語が発明されているということか、それとも、会話自体が重要性を持たなくなったということか、どちらかと思える。

さらに考える。ぼくにとっては、電話の会話は である。他人に聞かせるものでもないし、出来れば、電話を掛けている姿も見られたくない。姿を知られるのは仕方がないとして、表情や口の動きは隠したい。電話室とか公衆電話ボックスというのは、そもそもは電話機を保護するために作られたのであろうが、ぼくは、電話を掛ける人に密室感覚や安心感を与えるためにあつたと思っている。

それでも、かつての人々は、公衆電話ボックスに入っても舗道に背を向け、顔を傾け、口を隠して話していたのである。ふと思わず大声を発したりすると、突如我にかえって、大いに恥じたりした。

だが、携帯電話で話しながら街行く人には、秘め事感覚はまるでない。無防備である。③ 誇示しているかと思える人すらいる。肩がぶつかりそうな雑踏で、聞く気がなくても会話の内容がわかることがある。ぼくの方が気を使って何も聞かえていないという顔をするのだが、ご当人は一向に平気で、声をひそめることもない。その内容は、当然に、わざわざ電話で、それも歩きながら話すことでもあるまいという内容である。

ぼくには、そのことの方が恥ずかしい。他人様が群れていると真中で、大声で話すこともあるまいと思う。どうやら、携帯電話というのは、④ 人間を透明人間にしてみようらしい。群衆の中の一人という緊張感を、見事に忘れさせてしまっているのである。

〔阿久悠「文楽 歌謡曲春夏秋冬」より〕

問一 線①「歩きながら話さなければならぬような緊急の用件」とありますが、筆者が考える緊急の用件とは、たとえばどのような問題ですか。文中の言葉を用いて、四十字以内で書きなさい。

問二 線②「街行く人を見てみると、会話の都合によって歩を止めるといふ人はまずいない」とありますが、そのようになったのはなぜだと筆者は考えていますか。「くから。」につながる形で、文中から十六字で書きぬきなさい。

問三 にはあてはまる言葉を、文中から三字で書きぬきなさい。

問四 線③「誇示している」とありますが、ここでの意味として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア それとなくほめかしている。
- イ とても恥ずかしそうにしている。
- ウ 得意になってみせびらかしている。
- エ 本気であることを示している。

問五 線④「人間を透明人間にしてみよう」とありますが、ここではどのようなことですか。次の文の A・B にあてはまる言葉を、文中から A は十三字で、B は三字でそれぞれ書きぬきなさい。

- ・ A を忘れさせ、電話の内容を他人に知られても平気であるという B な状態にしてみようこと。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

- ① 人間が生きていくうえでいちばん大切な食べ物として、米と塩がある。米についてはよく知られているが、日本人の塩づくりの技術は、いったいどのようなアイデアにうらづけられていたのだろうか。
- ② 日本は海水から塩をとる以外に、いわゆる食塩とよばれる結晶した塩はとれない。海から塩をとる以前は、日本人は塩分を含んだ食品から塩を摂取していた。塩辛い塩化物を含んだ動物の内臓や木の芽などには塩分が多く含まれるから、山の民は、海の塩がとれない場合にも、そうした塩分をとることで生きていた。さらに、「塩の実」とよばれる木の実がある。秋になると黒い小さい粒ができて、その上に結晶した食塩がつく。くっついた食塩の粒を水で洗い落とし、その塩水をたくみに保存する方法があった。これが山の民が食べていた食塩の木である。この木の植物名を、ヌルデという。日本人はヌルデの実からも食塩をとった。
- ③ しかし、多くの人は海水からとれる塩を大事にした。海水から塩をとる、つまり製塩することが大切になる。④食塩水である海水そのものは、そのまま飲むと人は病気になるからだ。なぜかというところ、塩化物である海水には、塩化ナトリウムだけではなく、他の塩化物も含まれているからだ。これらの塩化物は人間の胃壁を侵すから、病気になるのである。そのため、塩化ナトリウムを中心とした結晶をつくる必要がある。
- ④ つまり食塩を海水からとって結晶させることが大切になる。そのためには、海水そのものをいきなり煮ても濃縮できるが、手間もかかり、できる量も少なくて効率が悪い。そこで、いわゆる天日製塩的なやり方を併用することになった。これが「藻塩焼き」とよばれる日本人の塩づくりのアイデアである。
- ⑤ 藻塩焼きというのは、簡単にいえばホンダワラを利用して塩をとる方法であった。海藻のなかで、食べられないのはホンダワラだけで、ほとんどの海藻は食用になった。食べられないホンダワラとよばれるその海藻を、俗に「藻塩刈り」とよばれるように、刈りとって集める。そして、刈りとったものを桶にくんだ海水の中に一度ひたす。海水にひたしたホンダワラを桶の上に棒を渡して、天日で干す。海藻の表面は複雑な広がりをもっているから、蒸発する面積が広いので、短い時間で海水が蒸発する。蒸発して濃縮された食塩を、もう一度その桶の水で洗って、またそれを干す。それを繰り返すことを一日中続けていると、藻塩、つまりホンダワラの中の塩水の濃度が、ほぼ一パーセントほどの塩分を持つようになる。それを今度は煮るわけである。そうすると、自然の海水を煮るやり方に比べて、十倍ぐらいの効率で水分が蒸発して、多くの結晶した塩がとれる。
- ⑥ 塩には、困った特徴がある。焼いた瞬間には、塩はりっぱな結晶塩であるが、次の瞬間には、たちまち崩壊し始める。吸湿性が高く、湿気を多く吸う。ナメクジに塩をかけるとナメクジが死ぬのは、食塩によって水分を吸いとられるためである。軟体動物のナメクジは水分を吸いとられると簡単に死ぬ。これと同じように、漬物にしても、塩で漬けておくと水分が吸いとられ、繊維が残ってタクアンがしなびていく。梅がしなびて梅干しになる。これは食塩が水分を吸いとるからである。水分を吸いとるため、食塩を完全な状態で保存したいという願いは、できたときからすでに食塩を空気に触れさせないようにする工夫になった。
- ⑦ いまだったら、真空パックの缶詰にしたらいいのだが、昔はそれができないから、動物や植物の組織の中に食塩を入れ込んでしまうのである。それが塩魚や漬物を生んだ日本人の知恵であった。今も残る東北地方の塩ザケも、なぜザケを塩に漬けるかというところ、これも塩を保存するアイデアなのである。東北地方には長い冬が訪れる。冬は寒いから塩が焼けない。そこで塩魚の形で一年間保存したのであった。
- ⑧ 食塩の状態のままであつたら、分解してしまつて一年も保たない。ところが塩魚にしておくと、一年でも二年でも保つから、真っ赤なイワシの塩漬けとか、サケなどに過剰な塩分を入れて人間の暮らしに必要な塩を保存しているのだ。魚に入れるのは、塩のすぐれた保存法であつた。
- ⑨ この塩の保存アイデアが、日本では味噌や醤油として発達し、梅干しや漬物、塩辛や塩魚の発達を生んだ。  
(樋口清之「逆ねじの思想」より)
- 問一 ①〜⑤段落は何について述べていますか。文中から十一字で書きぬきなさい。
- 問二 日本人は海水から塩をとる以前は、「動物の内臓」、「木の芽」とあと一つ何から食塩をとっていましたか。文中から五字で書きぬきなさい。
- 問三 線①「食塩水である海水そのものは、そのまま飲むと人は病気になる」とありますが、それはなぜですか。その理由を文中の言葉を用いて、四十字以内で書きなさい。
- 問四 線②「食塩を海水からとって結晶させる」とありますが、食塩を結晶させるとはほぼ同じ意味を表す言葉を、文中から四字で書きぬきなさい。
- 問五 線③「塩には、困った特徴がある」とありますが、どのような特徴ですか。その特徴が最もよくわかる一文をさがし、初めの五字を書きなさい。
- 問六 線④「この塩の保存アイデア」とありますが、具体的にはどのような保存法ですか。「保存法。」につながるように、文中から二十二字でさがし、初めと終わりの五字を書きなさい。